

# 言語表現に対する解釈のジレンマ

高 本 條 治

## 一 寛容さと人間くささ

語用論的な手法を使った言語研究に対して、しばしば「客観性に乏しい」、「体系的でない」、「結論が不明確だ」などといった批判を受けることがある。それらは言語学をいわば「科学（サイエンス）」と見なす立場からの批判である。「言語学は科学だ」と言い切る人は少なくない。

しかし、私は次のような立場を採る。科学的な言語学の価値はもちろん認める。しかし、言語学のすべてが必ずしも科学である必要はない。語用論は、ことばと人との関わりをありありと見ようとする一つの姿勢である。そこでは科学的な厳密さよりも、人間的な寛容さが必要とされることがある。それはまさに「プラグマティック・トランス（語用論的寛容）」と呼ぶにふさわしい。

私自身にとっても「語用論」との出会いはいちど救いだった。語用論には、己れの主観性や主体性を回復してくれる癒しがあり、部分的・限定的なことにひたすら打ち込める自由さがあり、到達点にこだわらずにプロセスを見つめていられる、良い意味で

の恣意性があつた。

語用論においては、実際に言われたことだけでなく、言われなかったことも問題にする。また、思い浮かべられた解釈だけでなく、まだ思い浮かべられていない解釈候補も問題にする。つまり、客観的に観察できる現実の真相だけでなく、主観的に省察することしかできないような可能性についても取り扱うのだ。そのため、しばしば科学的な実証性や合理性を超えた議論が必要になる。「科学（サイエンス）」であるよりも、まず「人文学」＝人間くささの学（ヒューマニティーズ）」であることが語用論には求められるのである。

## 二 語用論という探求姿勢

佐藤信夫『レトリック感覚』の中に、「ことばは表現者と理解者の共同の冒険にはかならない」という有名なテーゼがある。この場合の「ことば」は言語構造の側面ではなく、言語使用の側面を指していると理解される。「表現者と理解者」は、一つにまとめて言語使用者と呼ぶことができる。また、「共同の冒険」というのは、言語使用者間の伝達が、相互の協調を必要と

するものであり、かつ、必ずしも成功するとは限らないということを示唆している。これは明らかに語用論の立場と通底する。

語用論 (pragmatics) は、研究対象を限定する呼称ではなく、研究姿勢を明示する呼称であるというのが私の見方だ。そのような学問領域呼称の代表例は哲学 (フィロソフィー) である。プラグマティックスはその誕生と発展の歴史において、「言語論的転回」以降の二十世紀言語哲学の知的成果に誘導牽引されてきた。そういう事実を考えあわせると、語用論を研究対象ではなく研究姿勢を示すという考え方があながち無軌道なものではないということに気づいてもらえるだろう。

言語学において、「音韻論」は言語の音韻事実を記述や説明の対象にし、「形態論」は言語の形態事実を記述や説明の対象にし、「統語論」は言語の統語事実を記述や説明の対象にし、「意味論」は言語の意味事実を記述や説明の対象にする。これらの分野呼称では、研究対象を限定することによって、その分野の研究領域を明確化しようとしているわけである。

しかし、「語用論」は、個別的・具体的・実地的な言語使用の中で、ある時は音韻事実を、ある時は形態事実を、ある時は統語事実を、またある時は意味事実を、さらに場合によっては、これ以外のさまざまな言語関連事実を問題にする。しかも、それらを問題にする場合に、実は言語関連事実だけを記述や説明の対象とするわけにはいかず、ある場合は、言語使用者に帰属する認知条件を同時に問題にしなくてはならず、また、ある場合は、言語使用者を取り巻く社会条件を問題にしなくてはならない。

つまり、そのような場合には、明らかに語用論が記述・説明の対象とする事象は、言語そのものの枠組みを超えてしまうのである。したがって、「語用論は、言語の〇〇を対象とする研究分野である」という言明では、明らかに無理が生じてしまう。そういうやり方では「語用論」の十分な定義にはなりそうない。しかし、言語構造論者の多くは、「語用論」を「統語論」や「意味論」と同じ次元に並べようとする傾向がある。むしろ、それに呼応する形で、言語使用論者は、言語学の中核であるはずの構造論を疎かに扱いすぎる傾向がある。

言語構造論者と言語使用論者との乖離状況について述べるのがここでの主意ではない。幸いなことに、言語構造論者と言語使用論者との対立はいまだに存続しているものの、和解に向けた対話は随所で始まっているように見受けられる。言語構造と言語使用の問題を統合的に把握するための新たな「補助線」が求められているのかもしれない。むしろ、もとよりそのような対話を求めている方々にとってはどうでもいい話かもしれない。だが、対話なき分裂状態を続けるだけでは二十世紀言語学をそのまま継承するだけである。

### 三 認知的条件と社会的条件

日本語を母語とする者同士なら、ある一定範囲の日本語の体系的知識を共有することができていて、それによって、日本語を用いた相互伝達がおおむね可能になっている。これは、言語という記号体系が、一般的・抽象的・普遍的性格を基本的にも

っているからである。例えば、「イヌ」という音の並びを耳にして思い浮かべる「犬」の概念そのものは、一般的・抽象的・普遍的であるし、「犬が走る」という文表現を目にしても、その対象を一般的・抽象的・普遍的な対象として心に思い描くことができる。

ところが、言語表現に対してであれ、何に対してであれ、解釈という行為は、意味を個別化し、具体化、特殊化する作業である。そうすることで、意味の内包を限定し、外延を特定する。例えば、何人かのひとが同時に「犬」を思い浮かべるとき、一人ひとりが具体的な個物として思い描く犬のありさまは、おそらくめいめい異なっているだろう。「犬が走る」という文にしても、さまざまな犬のさまざまな走り方が思い描かれることだろう。

そういう意味では、解釈において言語表現それ自体は一つの契機ではない。むしろ、解釈者が有する認知的条件（知識・記憶・信念・推論傾向等々）や、解釈者を取り巻く社会的条件（慣習・立場・役割・人間関係等々）が大きく関わってくる。そのため、たとえ言語表現それ自体が共有されていたとしても、解釈の成果については共有されないという事態が起こりうる。つまり、言語表現が備え持つ構造的條件は、認知的条件や社会的条件によって乗り越えられたりキャンセルされたりする余地が常に伴うのである。

認知的条件は個人の内面に由来する。比喩的に言えば、内部に自分一人きりしかない《認知ドーム》の中にいるとき、当の「わたし」は解釈作業において絶対的な決定権をもち、解釈

における座標原点となる。それに対して、自分のドームから出て、自分を取り巻く社会という《共生フィールド》の中に立つと、「わたし」の解釈は絶対的な決定権を保ち得ず、また同時に、自分の位置が解釈の座標原点であるわけでもない。そうした相対的意識の中で「社会的条件」は発生する。

言うなれば、私たちは己れの《認知ドーム》を自分自身の棲み家にしつつも、必要に応じて他者に開かれた《共生フィールド》に出かけていかざるをえない。誰かに対して言語表現を使うとは、そうした行き来の証しである。人によって「外出」の頻度は違っているかもしれないが、生涯己れのドームから一歩も出ないひとはいない。

#### 四 誠実さの表現

自分なりに心の中の誠実さを、できるだけ誠実なやり方で表現したいとする。このとき、その表現自体には、うまく慰藉や調停や和解や救済の機能を果たすことが期待されている。しかし、現実には、そのような計らいを託されたにも関わらず、その表現が逆に新たな紛争や混乱を招いてしまうこともある。そういう点では、人間同士はそれほど簡単には分かり合えないのかも知れない。

ただ、互いにはほぼ同等の認知的・心理的な仕組みを共有し、ほぼ近似的な社会的生活の中で、共に今を生きている人間同士のことであるから、相手が置かれた境遇を、自分がかつて経験したことのある境遇に引き当てること、<sup>1</sup>「わかったことにす

る」ことはできる。このこと自体、認知的条件と社会的条件とによって方向づけられた解釈に他ならない。

己れの誠実さを相手に伝えることはむずかしい。心の中に抱いている誠実さは、ただそれだけでは相手には伝わらない。相手から受けた解釈を改めて相手に表現する必要がある。自分の心の中にある誠意を、いかにして表現として相手に送り届けるか、そこが問題である。

厄介なのは、誠実さの表現は、言語表現だけでは不足するところが少なくないという点である。言葉はかえって本当の誠実さを虚飾してしまうことがある。時として、自分が最も誠実に発した言葉が、相手には虚妄のまやかしと受け取られ、そうした言葉を発しないことの方が誠実なのだとしり返されることさえある。特にメールや電話の場合、通常は文字や音声によって実現された言語表現しか使えない。このような媒体で表現された誠実さは常に危うい状況に置かれている。

かといって言語表現を一切排するというのは、さらに危うい。言語をまったく用いないで誠実さや誠意を表現するというのはむずかしいということだ。自分としては誠意を示したつもりであっても、その言語表現が、相手に悪意で解釈されてしまうということもある。それが契機になって、いわゆる「売り言葉に買い言葉」という状況が発生してしまうことも考えられる。人と人との結び目に位置する誠実さの交流が置いてけぼりにされそうになる瞬間である。

## 五 最適関連性の見込み

人類学者のスペルベル (Spelber, Dan) と言語学者のウィルソン (Wilson, Deirdre) によって、人間の認知と伝達に関する一般理論として提唱されているのが「関連性理論 (Relevance Theory)」である。この理論の中心に据えられているのは「関連性の原理」であるが、「認知原理」と「伝達原理」の二つの原理に分けられる。「認知原理」の方は「人間認知は最大関連性を満たすようにチューニングされている」というものであり、また、「伝達原理」の方は「すべての意図明示的刺激は最適関連性を見込みを伝える」というものである。

ここに出てくる「関連性」というのは、一般的な意味ではなく、この理論の内部において措定されている概念であり、「労力 (Effort)」と「効果 (effect)」という二つのパラメーターによって決定される相対的概念である。「最大関連性」とは最少の労力負担によって最大の認知効果が得られるようなケースだ。つまり《最少労力・最大効果》である。それに対して「最適関連性」というのは、労力負担に十分見合うだけの認知効果が得られる最適バランス状態を言う。つまり《相応労力・相応効果》である。

関連性理論の認知原理 (人間認知は最大関連性を満たすようにチューニングされている) に基づけば、私たちの認知器官や認知処理は、同じ認知効果が得られるならば最も労力負担が少なくなるように「チューニング」(同調) されていることになる。逆に言えば、人間の認知は、人間という種にとって最も都合の良いやり方で、情報収集と情報処理とができるような仕組

みになっている。人類はそのような方向に進化してきたと言ってもよい。しかし、これはあくまでも認知器官や認知処理の次元での話である。異なった個体が言語等を介して伝達を行う場合は、「最大関連性」ではなく「最適関連性」が求められる。これこそが関連性理論の骨子であると言ってよい。

関連性理論の伝達原理（すべての意図明示的刺激は最適関連性の見込みを伝える）が適用されるのは、「意図明示的刺激」である。したがって、たとえ言語活動に隣接した現象であつても、偶発的な（非意図明示的な）現象は除外されなくてはならない。また、「見込みを伝える」ということは、それが必ずしも実現するとは限らないということでもある。このあたりに、具体的な言語データを関連性理論の枠組みの中で取り扱う際の困難さがある。私たちは常に二つのことを気に留めなくてはならない。第一にそれが「意図明示的（ostensive）」であるかという点、第二にその「見込み（presumption）」が十分達成されているかという点である。

関連性理論から得られる二つの帰結は特に重要である。第一は、「第一解釈Ⅱ最終解釈」という原則である。つまり、これは最初に最適関連性を満たした解釈に到達した場合、それこそが話し手が意図した解釈であると見なすことである。よほどのことがない限り、聴き手がそれ以上の労力負担を求められる正当な理由はない。第二は、「余剰労力Ⅱ代償効果」という原則である。聴き手が余剰な労力負担を行った以上、そこでは必ずその代償として効果が求められる。すなわち、代償効果が得られる限り、聴き手は余剰な労力負担を続ける可能性がある。

《第一解釈Ⅱ最終解釈》の原則と《余剰労力Ⅱ代償効果》の原則とは、実は直交した性格を持っている。その二つの原則を矛盾なく結びつけているのが関連性理論なのである。

留意すべきは、いわゆる「深読み」（そして「浅読み」）の問題である。《余剰労力Ⅱ代償効果》の原則で解釈作業を行うケースでは、より高い効果の達成を期待し続ける限りにおいて、「深読み」に入り込むことが可能である。しかし、自分以外の読み手が、自分と同等の「深さ」まで付いてきてくれるかどうかは何の保証もない。過ぎたるは猶及ばざるがごとし、ということもある。

通常、私たちは《第一解釈Ⅱ最終解釈》の原則に従って、そこそこの解釈が得られれば、それでよしとする。データ分析を行うという立場は、しばしば「浅読み」（解釈不足）か「深読み」（過剰解釈）のどちらかに陥りやすい。ほどほどの解釈やそこそこの解釈で手を引くというのは、実はかなり厄介である。「ほどほど」や「そこそこ」の水準を見極めるのが難しいのだ。しかし、そうした水準に関する問題もまた、関連性理論における重要な探求テーマの一つである。

## 六 協調の原理

哲学の言語論的転回のと、言語哲学はやがて論理実証主義と日常言語学派とに二分された。後者に属するグライス（Grice, Paul）は「論理と会話」という講演論文の中で「協調の原理（Cooperative Principle）」を唱えたことで知られている。

グライスはよれば、会話参与者にその会話を続けていく意志がある限り、「協調の原理」は不可侵の暗黙ルールとして遵守される。つまり、人は会話に参与する限り（会話参与者である限り）「協調の原理」から自由にはなれないということだ。この原理は、意識されるかされないかに関わらず、私たちの言語コミュニケーションを背後で支え続けている。したがって、私たちは会話が円満円滑に進んでいるとき、ことさらこの原理を意識することはない。

グライスはこの「協調の原理」の下に四つの「マキシム(maxim)」を配置する。なお、この「マキシム」にはさまざまな訳語が使われてきた。最も広く支持されているのは「公準」という訳語だろう。次いで「格率」という訳語も使われてきた。「一般原則」「行動指針」などという訳語もある。いずれにせよ、主観的に捉えられる実践原則や行動要請であり、原則は破られ、要請は否認されることもある。グライスのマキシムの考え方を理解する上では、この点が最も重要である。

グライスは四つのマキシムを指定する上で、カントが唱えた四つの範疇（カテゴリー）を適用した。すなわち、「量(quantity)」、「質(quality)」、「関係(relation)」、「様態(manner)」の四範疇である。したがって、グライスが立てた「会話のマキシム」は次の四つとなる。

- ・ 量のマキシム……必要十分な量を述べよ。
- ・ 質のマキシム……嘘を述べべからず。
- ・ 関係のマキシム……話の関連性を保て。
- ・ 様態のマキシム……適切なやり方で述べよ。

これらはいくまでも原則であり要請である。破られない原則はない。拒まれることのない要請もない。グライスはそこに着目した。つまり、いずれかのマキシム（あるいは複数のマキシム）において明らかな違反が見られるケースで、いったい何が起きているのか。そこで彼が着目するのが「推意(implicature)」の生成ということだ。この用語(implicature)はグライスがラテン語をもとにして新たに造り出したものだが、「含意」「含み」などとも訳される。何らかの推論の結果として得られる伝達内容のことである。

グライス自身は、「推意」を「会話の推意」と「慣習的推意」に分け、また、「会話の推意」を「個別化された会話の推意」と「一般化された会話の推意」とに下位分類している。しかし、その分類法は必ずしもクリアなものではない。特に、「慣習的推意」と「一般化された会話の推意」との差がどうしても不分明になってしまいがちだ。そこで、「推意」に関するグライスの下位分類については、ここではあえて細かい議論はしない。それより何倍も重要なことは、上記の四つのマキシムを立てたグライス自身が、これらのマキシムに違反した言語コミュニケーションが実在する、いやむしろ、マキシム違反が多発するのが普通だということを自ら認めていることである。そして、その場合でも「協調の原理」は守られているとグライスは見る。つまり、言語表現を用いたコミュニケーションは、必ず「協調」に成功していると見なすのである。「量」「質」「関係」「様態」の各マキシムが違反されたときは、それを乗り越える代償効果が必ず発生するというわけだ。

## 七 コミュニケーションのパラドックス

ところが、現実にはグライスの「協調の原理」が維持されていないように見られる事態が発生する。それは、ミスコミュニケーション（伝達失敗）の場合もあり、デイスコミュニケーション（伝達忌避）の場合もあり、マルコミュニケーション（伝達過誤）の場合もある。これらはいずれも何らかの言語表現が相互に使用されているという点で、決してヌルコミュニケーション（伝達無効）ではない。言語表現は実際に使用されている。しかし、その結果、言語表現を介した「相互誤解」や「相互不達」や「相互抑圧」がもたらされる。「協調の原理」に従っているとは呼びがたい状況が引き起こされるのである。

そもそも言語表現を介したコミュニケーションは、「相互誤解」「相互不達」「相互抑圧」という三つのパラドックスを内包していると捉える見方も可能である。相互理解を求めれば必ず相互誤解の壁にぶち当たり、相互伝達を図ろうとすれば相互不達の限界を意識せざるをえず、また、相互解放を求めれば逆に相互抑圧の弊害を招いてしまう。そうしたパラドクシカルな状況の中で、私たちはそれでもなお言語でコミュニケーションしていかざるをえない。

第一の「相互誤解タイプのパラドックス」は、「自分が伝えようとしたことが相手に伝わらない」とか、「自分では伝えているつもりがなかったことが相手に伝わってしまう」といったタイプのパラドックスである。第二の「相互不達タイプのパラドッ

クス」は、例えば、「本当は何もコミュニケーションしたくないのに、見かけだけコミュニケーションのふりをしてごまかす」という場合がそうである。本当は何もコミュニケーションしたくないからこそ、見かけだけコミュニケーションのふりを糊塗してごまかすのである。第三の「相互抑圧タイプのパラドックス」は、「（上手に）コミュニケーションしなさいと要求されればされるほど、自分は（上手に）コミュニケーションできないという抑圧意識や圧迫感に襲われてしまう」というようなケースである。「自分の方が（上手に）コミュニケーションできない場合ほど、自分を棚上げして、相手に（上手に）コミュニケーションすることを要求するという態度に走ってしまう」ということもある。

言語表現が介在するコミュニケーションには、こういう三つのパラドックスが自ずと生じる。これは一見、言語に対する不信表明だと捉えられるかもしれないが、必ずしもそうではない。コミュニケーションというのは、相互作用に基づく動的なプロセスである。「相互作用」ということは、相手がいることを前提にするということだ。コミュニケーション参加者のうち、一人だけが아가いてみたとしても、どうしようもないこともある。また、「動的」というのは、絶えず変化し続けているということである。変化は良い方向に向かうこともあれば、その逆の結果を招いてしまうこともある。さらに「プロセス」というのは、その時々状態がけつして最終的な「結果・結末」ではないということを表している。

コミュニケーションはそうした他者依存的、流動可変的、発

展途上の段階に常に置かれている。したがって、「完全な相互理解」という要求水準はあまりにも厳しすぎる。人間らしさというものをじっと見つめれば見つめるほど、親友同士であれ恋人同士であれ夫婦同士であれ、人間の認知資源（記憶・知識・信念等）はみんな一人ずつ違う。個々の経験も異なるわけだから、経験に基づく推論のあり方も異なる。似たようで違った文化や社会の中で培ってきた社会的な規範性の差もある。高度に知的・情的に発達した人間は、同時に、他者とはそう簡単には理解し合えない仕組み（認知機構）になっているのだ。

そういう点では、いきなり「完全な相互理解」という水準を求めるべきではなく、「未熟で不完全な相互理解」に対しても、積極的な受け入れ姿勢を保つことが重要ではないかと思われる。極論すれば、個人と個人との社会的な付き合いのスタートは相互誤解から始まると言って差し支えあるまい。ただ、「誤解された」「誤解した」という経験の積み重ねが相手への関心や興味の引き金となる。「ほどよい相互理解」は、相互誤解・相互不達・相互抑圧という三つのパラドックスを乗り越えようとするコミュニケーションの営みの中で培われていく。

そういう点では、言語表現が介在するコミュニケーション（言語コミュニケーション）が、相互誤解タイプのパラドックス、相互不達タイプのパラドックス、相互抑圧タイプのパラドックスを常に可能性として有しているということは、必ずしも言語に対する不信表明であるとは言えない。むしろ、相互誤解や相互不達や相互抑圧が、「ほどよい相互理解」のための重要な前提であり階段であり段階であるとすれば、このような見方

は言語コミュニケーションに対する信頼回復のための一助となるであろう。

## 八 寛容さというジレンマ

社会は個人の集まりとして何らかの集団らしさを構成し、個人はそうした社会の中でその人間らしく生きていくしかない。ならば、言語表現の解釈という問題を考える際にも個人の認知的条件は外すことができない。個人は社会的条件の制約のもとにあり、社会は成員一人ひとりの認知的条件の相互作用によって制約を受ける。認知的条件と社会的条件は、なにがしかの言語表現を解釈する際のコンテキストに直接影響を与える。

言語表現によって記されたテキストと、その読み手の関係を考えてみよう。解釈を決定づけているのはテキストそのものの言語表現によって表示された内容だけではない。個々の読み手がいかなるコンテキストを想起しつつ、その当該テキスト部分を処理するのかという点に目を向けていかななくてはならない。解釈行為において決定的な働きをするのはテキストよりもむしろコンテキストである。そういう立場からは、テキストは解釈を惹起する直接的契機に過ぎない。もしくは、テキストはあくまでも解釈行為が向けられる対象に過ぎない。

食べ物の中にすでに味覚が備わっていると主張できないように、テキスト自体の中に解釈過程を包含させるのは無理である。解釈過程は読み手の認知作用であり、したがって、当該のテキストを解釈する上で要請されるコンテキストは、その読み手



個々の認知的条件・社会的条件によって左右される。ここに、書き手側の意図と読み手側の解釈がずれる一大要因がある。リアルタイムに進行する口頭でのコミュニケーションにおいても基本的には同じことである。

そのため、言語表現に対する解釈はしばしばジレンマに陥る。表現者側の意図が何であったかという問に対する明確な答が得られないとき、理解者側の解釈はいくつかの候補の間で揺れ動くのである。解釈可能性の広がりの中で、解釈の優先度を追られるとき、私たちはどのようにして「ほどほどの解釈」（最適関連性を満たす解釈）にたどり着けばいいのだろうか。そうした自問がまたジレンマの種となる。

語用論という探求姿勢は、こうした言語コミュニケーション上のジレンマ問題に対して、寛容な対応が必要であることを示唆する。ただし「寛容」というのは難しい。何でもかんでも許すことが「寛容」ではあるまい。ここで言う「寛容」というのは個人の徳目に帰せられるようなものではない。相手が自分とは異なった認知的条件を持ち、自分とは異なった社会的条件に置かれていることを配慮することが重要である。

言い換えるならば、言語表現に対する解釈のジレンマという問題は、言語コミュニケーションにおける「人間くささ」を探求する姿勢をもつ限りにおいて、「語用論的な寛容さ（プラグマティック・トランス）」は如何にあるべきかという課題へと通じている。そういう方向性を目指しながら、今後ともこの課題を追究していきたいと考えている。

## 付記

十一年以上前、渡辺英二先生に「弱さは強さだ」というパラドックスについて愚説を聞いて頂いたことを思い出す。個々の存在者としての自分は弱い。これはおそらく他人も同じことだ。自他の対称性（シンメトリ）がそこにある。自分の方が弱さを表現すれば相手からも弱さの表現が返ってくる。そのとき弱さと弱さは結びつく。自他の弱さを語り合う姿勢が生まれる。自他の対照性（コントラスト）がやがて見えてくる。このような人と人とのつながり具合は、この段階ですでに「強い」と言える。そのときの渡辺英二先生との歓談が小稿の下地となっている。昨年の春、渡辺英二先生は鬼籍に入られた。先生の多大なご恩に感謝し、心よりご冥福をお祈りしつつ、合掌。

（上越教育大学准教授）